

Mar. 2009

“あ”はすべての原点、“そ”は蘇生。
阿蘇は原点に返って復活する場所。

素顔の阿蘇に触れ、
自分自身を探してみませんか。

素顔の**阿蘇**を探す旅。

大陸

ASO Continent



道が廊下で旅館が部屋で

南小国町・黒川温泉

泉質の良さはもちろん、

各旅館が、競い合うように趣向を凝らす露天風呂も魅力的な黒川温泉。

週末や祝日はだけでなく平日も、多くの温泉客が楽しそうにそぞろ歩く。これほどまでに人を魅了する地域となつたキーワード。

それが、「黒川一旅館」である。

取り残された黒川温泉

後藤健吾さんは語る。

今やその名は全国区となつた黒川温泉にも、低迷した時期はあつた。

「昭和39年の東京オリンピックの年に九州横断道路が完成して、2、3年は賑わいましたが、その後は鳴かず飛ばず。当時は温泉地にホテルが建つなど大型化していく傾向があつて、山間にある黒川温泉は『取り残された感』がありましたね」。黒川温泉観

理事らの世代が故郷である黒川温泉にリターンを始め、旅館や商店に若手が戻つた。「それでも、仕事はマイク口バスで来る老人会などの団体の送迎くらい。夕方はソフトボールをして遊んでいましたよ」と苦笑いする。

ところが、そんな中で1軒だけ賑わいを見せる宿があつた。旅館『新明館』である。「新明館の後藤哲也社長の持論は、黒川の田舎らしさを大



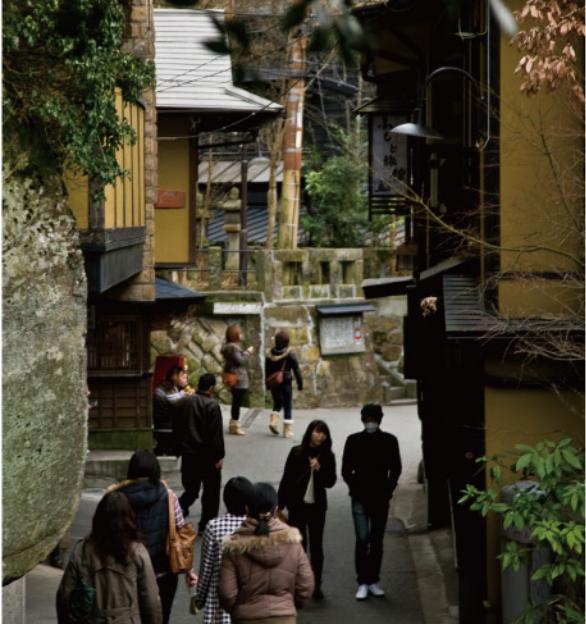
切にするということでした。ところが当時、旅館は近代的でないと流行らないという考えが常識。彼の意見はなかなか受け入れられなかつたんです」

努力の半分を地域へ

どんな世界でも、低迷を打破する秘訣は「常識を疑う」と。『新明館』後藤社長の、当時は「常識はずれ」「だつた意見を「理解できた」という後藤理事ら若手世代。彼らは

ドしていた湯布院温泉の視察をはじめ、地域に雑木を植えるなど、地域を活性化する取り組みに着手した。同じ頃、黒川温泉の若手組の一人が、野沢温泉の森行成社長の講演を聴く機会を得る。「とにかく、森社長の話がすごい」というんで、5、6人で野沢温泉に行つたんですよ。森社長には、自分の旅館に対する経営努力の半分を地域に向けなさいと言われました。それが必ず自分に戻つてくる」と

昭和61年、黒川温泉観光旅



黒川温泉街には、立ち並ぶ旅館をつなぐ通りに飲食店や土産物店、雑貨店も多いが、どの店も空飛な看板などはない。「山間にある田舎の温泉地らしさを大切にする」という地域共通の意識が、旅館以外にも浸透していることがうかがえる。



①旅館や通りの木は、近隣の山にある雑木を形が不揃いのまま移植。自然の木立のようで、歩いているとホットするような気分になる。②裸電球を使った街灯。ボツリと灯った明かりが、垣根や雑木によく似合う。③小国杉で作られた『入湯手形』1200円。黒川温泉の旅館にある露天風呂に、3力所まで入ることができる。④黒川温泉では環境整備の一環として、昭和62年に個人看板が撤去され共同看板が設置された。⑤『風の舎』は、黒川温泉観光旅館組合の事務所。観光案内所も兼ねており、『入湯手形』はここで購入できる。

館協同組合ではこれまで以上に若手を多く抜擢。同時に、看板班、環境班、企画班という部署を作る。看板班の取り組みは、主に個人看板の撤去および共同看板の設置。環境班は自然と建物の調和をテーマに地域全体に雑木の植樹を行い、田舎らしさを大事にするため、あえて裸電球を使つた街灯の設置などを進めた。そして企画班が担当したのが、黒川温泉を有名にした『入湯手形』である。

『入湯手形』完成

昭和50年頃の露天風呂ブームは、黒川温泉の追い風となっていた。各旅館が露天風呂に改修の手を加える中、立地条件のため、どうしても露天風呂が造れない旅館が2軒あつた。「それなら、黒川温泉の旅館に泊まるお客様には、どの旅館のお風呂も楽しんでもらえるようにしよう」ということになり、『入湯手形』ができたんです」と後藤



黒川温泉を訪れる観光客には、若い家族連れやカップルも多い。『恋人たちの丘』は、すずめ地獄や清流の森の近くにあり、阿蘇やくじゅうの見事な眺めを楽しむことができる。

理事。自分のところだけでなく、黒川という地域全体を良くしようという意識。そして”共有し分かち合う”という発想が『入湯手形』となり、風情ある露天風呂でお客様を呼び込もうという良い意

味での競争意識も生んだ。『入湯手形』を販売している観光案内所『風の舎』周辺は、いつも手形を手にどの温泉に入ろうか”と、ガイドマップを見ながら楽しげに語らう温泉客で賑わっている。

黒川温泉街のいご坂脇にある『地蔵堂』には伝説がある。昔、豊後の国で病気の父親のために盗みを働いた男の身代わりに、首をはねられたお地蔵様があつた。肥後の国の修行者がそのお地蔵様を持ち帰る途中立ち寄ったこの場所で、お地蔵様の首は「ここに置いてくれ」と言わんばかりに持ち上がりなくなつた。ここにお地蔵様を安置すると、そこから湯が湧いた。それが黒川温泉の始まりだという。お堂には、使用した『入湯手形』がまるで絵馬のように置かれている。「また来れるよう」という観光客の思いだろうか。



先輩の成功が糧

「僕たちは、『黒川一旅館』という意識なんですよ。こう語るのは、黒川温泉観光旅館協同組合青年部の下城裕（たかひろ）さん。『黒川一旅館』とは、温泉街の道が『廊下』で、各旅館が『部屋』であるという意識。全員が同じ方向を向いてこそ、力は発揮される”。どんな組織にも通用するこの考えが、黒川温泉の地域づくり成功の秘訣なのである。

下城さんら青年部の面々も、一度は故郷を離れている。「帰つて来たのが、平成13、14年頃。黒川温泉が外部からもかなり注目されて、一番忙しい時期でした」。もともと「それほど、帰るつもりはなかつた」という下城さん

だが、地元が一丸となつて盛り上がりしている様子をメディアを通して見るにつけ、その中に入つて一緒にやりたいという気持ちが膨らんだという。

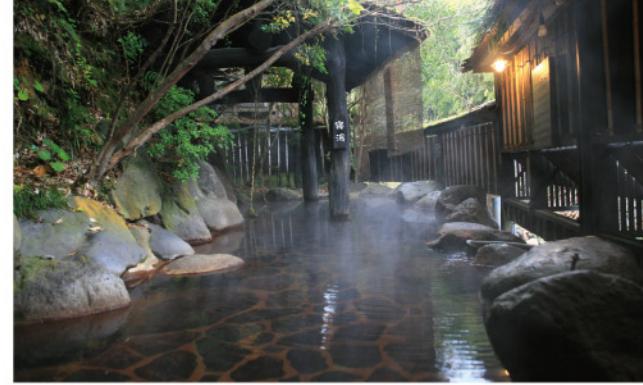
下城さんら17人が所属する青年部は、黒川温泉で『餅つき』や『やまなみ太鼓』、『竹灯り』など、主に冬のイベントを仕掛けている。「1、2月はどうしても客足が落ちるんです。そういうオフの時期をオンに変えられるように、冬に黒川温泉に来ると何か楽しいことをやつているよ、と思ってもらえるように」と下城さん。「僕たちの先輩が成功してますから。青年部もがんばらないと」と力強く語ってくれた。

本物の田舎であり続ける



黒川温泉観光旅館組合
青年部の下城裕さん

現在、黒川温泉観光旅館協同組合は、散策コースづくりに取り組んでいる。後藤理事は、「これまで黒川温泉街の中を楽しんでもらつていま



各旅館の露天風呂は、それぞれに情緒たっぷり。また来て、すべてを“制覇”したいと思わせるほどだ。(撮影：クラタニ写真工房)



『田の神様』と呼ばれるお地蔵様は、黒川温泉に10体ほどあるそうだ。



黒川温泉街には、昔話に登場するような景色も多い。賑やかな通りを歩きながらふと目に入る、時を止めたかのような佇まいに心が和む。



3



1



2



黒川温泉観光旅館組合の後藤健吾代表理事

したが、少しその外に目を向けて、黒川の自然体験と健康づくりも目的に訪れてもらえるようにと考えています」。後藤理事らは現在、散策コースマップづくりに奮闘中。マップには、散策コース途中で見ることができる山野草などの情報も掲載される予定だ。コースの折り返し地点は、「恋人たちの丘」と名付け

られた展望所。目の前は落葉樹が茂る阿蘇ならではの草原、遠くに目をやれば、久住の山々や阿蘇五岳の雄大な景色を満喫できる。「阿蘇という地域があつてこそこの黒川ですから。たとえば地元の食材をもつと生かすとか、取り組まないといけないことはたくさんあります」。人と自然が共存することで、見事な景観や文化・伝統が育まれてきた阿蘇。「黒川温泉の風情も、人の手が入らないと荒れてしまいます。常に『磨きをかける』必要が

あるんですよ」青年部の若手も、これまでの取り組みを担えるようになってきたと後藤理事が笑うと、「低迷期をみんなで協力して乗り越えた黒川温泉だという意識は、僕たちも持っています。青年部も地元が好きだし、がんばっていまと下城さんも頼もしい。黒川温泉がこだわる『黒川一旅館』。地域一丸で、『本物の田舎の温泉地らしさ』を守る。そして、本物だからこそ、心からくつろげる黒川温泉へ人はやつてくるのだ。

あるんですよ」

ゆっくりと、ほっこりと

いろいろな温泉地が点在する南小国町で、お気に入りの温泉を見つけてみませんか？

四季折々の里山の景色が魅力

小田(おた)温泉

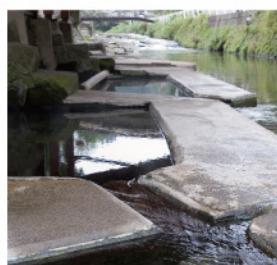
昔ながらの民宿や、離れるある瀟洒な旅館が混在する小田温泉。山と川、畑や民家のどかな里山の景色を見せてくれます。忙しい日常を離れた静寂の中で、野鳥の声やかすかな木々のざわめきを感じながらゆっくりと温泉に浸かってください。



懐かしさ漂う集落にある

満願寺温泉

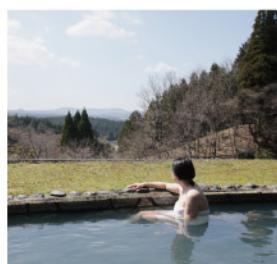
明治時代に建てられ、昭和50年頃に改築された公衆温泉「満願寺温泉館」は、地元の人に大切に守られています。内風呂はレトロなタイル張りで、露天風呂は建物前を流れる川の中。夏は、露天風呂の前で幼い子どもたちが川遊びしています。



見事な眺めを満喫

扇温泉

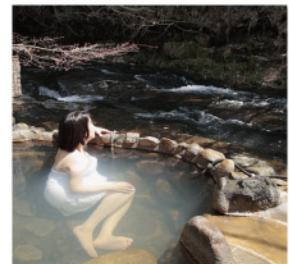
黒川温泉と満願寺温泉の中間に位置する山間にある温泉地。山と放牧地に囲まれた静かな場所に1軒の温泉旅館があります。四季折々の風情を楽しめてくれる山々の景色はもちろん、旅館裏手の高台にある露天風呂からの眺めは抜群です。



渓流沿いの静かな温泉地

白川温泉

小田温泉に隣接する、自然豊かな白川温泉。それぞれ違う湯量豊富な源泉を持ち、露天風呂の風情や食事にもこだわった温泉旅館が点在しています。南小国町の中でも新しい温泉地で、キャンプ場もあります。



江戸時代には上級藩士の御用達

田の原(たのはる)温泉

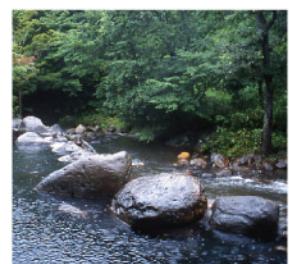
江戸時代には、肥後細川藩上級武士の御用達だった田の原温泉。泉源近くには縄文時代の遺跡も発見されたという歴史ある温泉地です。映画「男はつらいよ」第21作の舞台にもなりました。どの温泉宿も、趣向を凝らした家族風呂が人気です。



温泉街そろ歩きを楽しんで

黒川温泉

好きな露天風呂を3カ所巡ることができる「入湯手形」が人気。山間の斜面をうまく利用して建つ旅館をつなぐ道も、坂道あり、せまい路地ありと風情たっぷり。食事どころやお土産店などもたくさん。そろ歩きを楽しむにはぴったりです。



各温泉地に関するお問い合わせ / 南小国町観光協会 TEL : 0967-42-1444

(財)阿蘇地域振興デザインセンターホームページ <http://www.asodc.or.jp>

阿蘇の魅力を動画で配信！「阿蘇テレビ」 <http://www.aso-tv.com/>

阿蘇広域観光サイト「阿蘇ファンクラブ」 <http://www.asofan.net/>

ASO-NAVI
阿蘇ナビ
<http://www.asonavi.jp>



週末のお出かけはこれで決まり！ラジオ番組「ゆっくりのんびり ASO 大陸」(エフエム熊本) 毎週土曜日 12:30~13:00